

ポッキリ信仰の実態

——奈良・当麻・阿日寺の事例を通して——

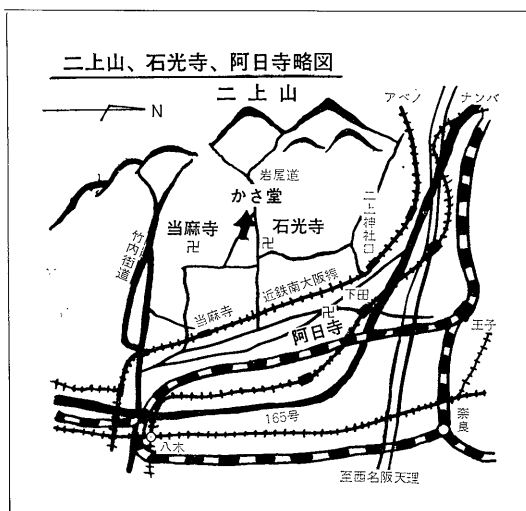
芝 崎 真 悟



「恵心僧都誕生之地」記念碑より二上山をのぞむ

最近、特にポッキリ信仰が非常な勢いで人々の関心を呼んでいます。このポッキリ信仰が世間一般の話題となり始めたのは昭和四十八年の四月頃からです。この頃より新聞、雑誌、テレビ等のマスコミが「切々と祈る安楽往生」「軽老大国のお年寄り」「老人の二つの顔」等というタイトルで紹介され始めました。これを知り、我々は医学が進歩した現代ではとても考えられないという驚きと、それでいて我々には何らかかわりのない、別の異質なものといった感じを抱くとともに、やがて次第に何とも仕様がないう人間のむなしさ、遣り切れなさといった限界を感じずには居られませんでした。というのは、医

学、医学技術の進歩が不老長寿という人間の普遍的な願いに答えようと努力しつづあります。昭和四十七年の厚生省の生命表によりますと、平均寿命男性七〇・四六才、女性七五・九二才に達しました。四十八年には女性の平均寿命は確実に七十六才代にのる見通しだと言っています。また健康状況を高令者調査によってみますと、昭和三十五年と三十八年を比較すると、男性、女性とも



丈夫な老人が大幅に増えているのです。

また今日は科学的合理性が強調されている社会でもあります。しかしながら人間の死という事実からは、誰しも免れることが出来ないのです。にもかかわらず、我々は日常、死という現実を見ようとせず、また見まいとし、否忘れようとしている様に思われます。仮りにこの死という現実を通して我々の足元を見つめた場合、これからあるであろう明るい、楽しい人生という夢がもろくも崩れ去るのではないかという恐れを抱くのです。これらさまざまな感想を抱きながら、我々はポックリ信仰を求める老人達の実態を足で膚で受けとめようと関西を中心に奈良、神戸、京都と時間の許す限り歩きました。特にマスコミ等でも取り上げられている奈良の当麻の郷、とりわけ浄土宗、阿日寺において多少調査を試みましたので、これを参考にしつつ、老人の求めるポックリ信仰とは何なのか。何が老人をポックリ信仰へと追いやるのか。とりわけ、我々社会福祉にかかわる者は、この老人達の姿をどの様に捉えればよいのだろうか。現代社会にとってポックリ信仰は、何を意味しているのだろうか。これら

の疑問について考察してみたいと思います。

二

実態に入るまえに、まず、ぼっくりという言葉の意味について少し触れておきたいと思います。新村出編「広辞苑」（岩波書店）によれば、(一)物のもろく折れ、またはこわれるさま、(二)急に死ぬさまとあります。またこれとよく似た言葉でこっくりという言葉がありますが、これも急に状態の変ずるさま。ぼっくり。続いて、こっくり往生というのは、長わすらいもなく、突然死ぬこと、急死、頓死と書かれています。つまり、ぼっくりという言葉は、ものの状態を表わしており、その状態が急に変化するさまを意味しているのであります。

では、このポックリ信仰は、どこに、どのくらいあるのでしょうか。

あちらにポックリ信仰があると言われれば飛んで行き、こちらにあると聞けば、すぐさまカメラ、ノート等を引提げて聞き歩くという様にして調べていますが、現在までで我々が知った限りでも十五ヶ所に昇ります。そ

こで、その一部を紹介しますと、

東北・山形の कोरोリ薬師、伊豆の明徳寺俗におまたぎ寺、奈良・当麻の傘堂、大阪・四天王寺の紙衣堂、京都・泉涌寺の即成院、神戸・須磨の那須与一、高松・木田のポックリさんと各地にあります。とりわけ、奈良の斑



祈願する老人たち（阿日寺にて）

鳩の里、法隆寺附近の吉田寺、当麻の郷の阿日寺等（ともに浄土宗）は、マスコミ等の影響もあって、最も広く知られており、また参拝者も多く、多い日には七百から八百人にも昇る

程であります。そこで、今回は恵心僧都源信を中心とする信仰が広がっている奈良の当麻の郷、とりわけ、浄土宗、阿日寺に焦点をあて、ポックリ信仰の実態について述べたいと思います。

このポックリ寺は、奈良県北葛城郡香芝町にあります。この地域は、中将姫伝説として名高く、遠くは万葉集に、近くは与謝野晶子、鉄幹等多くの歌人が愛した地で、極楽浄土への阿弥陀信仰を唱えた恵心僧都源信の誕生の地でもあります。この地には、若くて美しい尼が靈感を得て、蓮糸で一夜のうちに阿弥陀浄土図を織りあげたという当麻曼荼羅で知られる当麻寺、この蓮糸を五色に染めるため井戸を掘り、染めた糸を井戸の傍の桜の枝に掛けたとして知られる糸掛桜のゆかりをもつ浄土宗、石光寺があります。また太陽が西に沈むころ二上山のふもととは、まさに極楽浄土を思わせる幻想の地として、和辻哲郎氏や「死者の書」で有名な折口信夫氏が称えている地があります。この石光寺・当麻寺へ向う途中、ちょうど近鉄大阪線下田駅から歩いておおよそ二〇分程の所に恵心僧都誕生の寺として知られ、マスコミ等にも取り

上げられている阿日寺があります。

恵心僧都の著として名高い往生要集には、一言にして言うならば、厭離穢土、欣求浄土が教えられており、臨終の時が大切なときとして、その作法も詳しく述べられています。

この僧都の母が、臨終の折、僧都はかつてより民衆に教えていたとおり、母の室を清め、浄衣（新しい着物）を着せ、除魔の法を修し、静かに母とともに念佛し、無苦正念して七十二才の生涯を安樂往生されたといわれております。

これより、この寺では長寿息災、除厄、満願の三回の祈願をもうけています。

祈願の方法は、老人達が持参した下着、あるいは、さらし等、直接膚につけるものに、祈願の印を押してもらい、寺から渡された守り札を置き、蓮台の印を押した紙に住所、氏名、年令を書き祈願するのです。この寺に三度祈願すれば、「下の世話にならない様に、病の身なら早く直る様に、もし直らないという場合には、苦しむことなく、家族の者に下の世話をかけずにポックリ安樂往



「傘 堂」



傘堂で祈願する老人たち

写真は宅見竜雄氏の撮影 (47・5)

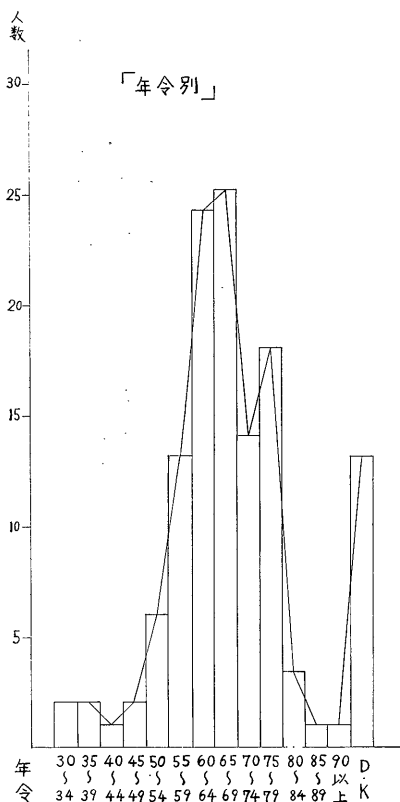
生出来る」とされています。この阿日寺より歩いて二〇分程の所に、牡丹の寺として知られる石光寺があります。この石光寺を出て、当麻寺へ向うと大和から大阪の難波に通じる岩屋峠に面して、堀でめぐらされた中心に西四方の傘を広げた様な形の小堂があります。建物の重心が真中の太い一本の角柱に集まる仕組の珍しい建物で、これを傘堂と呼んでいます。以前はこの傘堂の心柱

の東西上部にある厨子に、弥陀が安置されていましたが、現在は石光寺に傘堂納経印と共にあり、釣られていた喚鐘は近くにある明円寺にあずけられています。この傘堂の由来の中に、次の様なことが書かれています。

「庶民信仰の盛んになった鎌倉、室町時代の頃より釈迦の説く、四苦のうち、最後の死者の安心を得るため、この堂に三度祈願すれば、長い病による、すそ(大小便)

の世話を他人に掛けず、又自分も苦しむことがなく、生命の終るときには、雨が降らず、晴天に恵まれる等、命終の時の苦難が消滅して安楽が得られると伝えられ、大和名所図絵、西国名所図絵に見る江戸時代の庶民信仰の旅などにも傘堂の参拝の様子が見られる」としています。

祈願の方法は、老人達が自らの新しい下着を持参し、傘堂の弥陀のある石光寺に行つて、「傘堂」



将来の生活の心配ごと

内 容	実数
お金のこと	6
身体健康	12
家族のこと	10
子供のこと	9
その他	13
な し	10
D. K	65
計	125

ポックリ寺へ来た動機

内 容	実数
安楽に往生したい	52
死にたい	1
家族の世話になりたくない	13
長生きしたい	10
お参りにきた	1
下の病気にきくから	1
先のことが不安だから	1
安心出来るから	1
幸せを祈る	1
自分の将来の希望と安全	1
たのまれてきた	3
病氣しない様に	2
その他	5
D. K	32
計	125

と書かれた納経印を受けて、傘堂に参り、持参した下着を腰に巻きつけて、弥陀の安置されていた所を正面に、念佛を唱えながら、左から右へ三回、逆に右から左へ一回、手を合わせながら、ぐるぐる回り、最後に弥陀を背にして、用便をする様な姿でお尻をつき出し、お尻をポンと一回叩くのです。この祈願方法も、いつごろから、誰れが始めたのか解りません。ただ、三回回って、逆に一回回るといふのは、三回の祈願がぬけない様に ∞ をする意味と思われるます。

五月中旬頃、当麻寺で古くからなされてゐる聖衆来迎練供養会式、俗に「お練り」と呼ばれてゐる行事が、行なわれる頃になると、この傘堂も老人達で賑わうのです。先の阿日寺と異なる点は、マスコミ等によって広範囲に

ポックリ寺についての情報

情報時期—ポックリ寺について、いつ頃知ったか

内 容	実数
つい最近知った	52
前から知っていた	68
D. K	5
計	125

情報源—どのようにして知ったか

内 容	実数
テレビ、新聞等で知った	32
人から教えられてわかった	72
母から聞いて	16
近所の友達から	14
その他の友達から	28
D. K	14
D. K	21

だれと来たか

内 容	実数
1人で来た	2
2人以上で来た	119
息 子	4
孫	4
夫 婦	3
親 戚	1
兄 友	3
弟 達	102
その他	2
D. K	4
計	125

居住地からの交通機関

内 容	実数
電車、バス	99
自家用車	11
歩いて	14
D. K	2

居住地からの所要時間

内 容	実数
1 日	1
半日以上	0
半日以下	6
2～3時間以内	115
D. K	2

法によって実施しました。結果は、上の如くであります。

これらの調査結果を簡単に要約致しますと、祈願に来る人達の九割が女性であり、六〇代以上が約七割を占めていると

知られていない。むしろ老人達の口から口へと伝えられている所が多い様で、その意味からポックリ信仰の原形を見る思いがします。

三

先に述べました阿日寺にて、多少調査を行いましたので、その一部を紹介し、ポックリ信仰の実態について考えたいと思います。調査の時期は、四十八年七月十日で、対象は祈願に来る人達の一部一二五名で、直接面接

ころより、ポックリ信仰は女性老人の信仰であると言えます。またその老人達の大部分は、息子との同居老人でありました。現在一番気がかりに思っていることは、やはり身体の健康で、次に家族に関することでした。その為、安楽往生したい、家族の世話になりたくない、長生きしたい等と祈願しています。しかも、半数はポックリ寺の由来についてハッキリと認識していません。では、ポックリ寺について、どの様にして知ったのでしょうか。以前から知っていた者が五割、つい最近知ったのが

四割で、それも人から教えられてが約六割と最も多く、友達からが五割、家族、母からが三割となっていました。またその場所についても、仲間、友人達から教えられてが五割で、全体の八割が仲間、友達と一緒に祈願に来ていました。これら老人達の九割は、二～三時間かけて、電車、バス等を利用して来ており、遠くは鹿児島から来ている人が五人もいましたが、多くは関西周辺の老人達でした。

今回は、プリテストの段階でしたが、以後引き続き詳細な調査を行うつもりですが、さしずめ、これらの結果から、きわめて概括的に現代社会におけるポックリ信仰の意味について、少し考えてみたいと思います。

四

現代社会は、収入の少ない者、能力の低い者、体の弱い者、老いたる者等にとっては全く惨めな悪い条件に置かれていることは誰れの目にも明らかな事であります。

とりわけ、健康、特に身体上の健康を阻害した場合、たとえ能力があり、お金があったとしても、世の中の楽し

みから一切隔離されてしまうのです。農村や漁村の者にとっては、この世の中は都会生活者のための世の中のように見えます。また老人にとっては、映画、テレビ、雑誌等レジャーからは引き離され、それらすべては若者の為にあるようです。現代社会の特徴を一言にしていえば、若者の文化、社会、すなわち「健康社会」と言えましょう。

こんな現代社会にあつて、なおかつ、老人は従来の家族制度が崩壊し、個人の尊厳が尊重されるようになったのは良いのですが、その為、比較的安定していた地位に置かれていたにもかかわらず、著るしい不安定な地位へと追いやられました。加えてこれら不安定な地位にある老人を支えるだけの十分な保障があれば良いのですが、表面的、形式的な現在の保障では如何ともなし難いのです。それに現在の核家族化傾向に伴い、老人と若者との間を遊離化し、より老人を孤立化させつつあります。アメリカの社会学者D・E・スパークスは現在日本の経済状況を考え、老人と若者の矛盾を次のように言っています。「老人の多くは厭でも子供に頼らざるを得ないのであ

り、また子供の方は、できれば別居して生活したいと思つていいると言えそうである。」と述べています。この様に老人は社会から孤立され、疎外され、最後の砦であると思つていた家族からも見離されようとしています。この様な状況下にあつては、老人自らの生活、生命は自らで守るより外ないのであり、その支えとしての最大の武器は能力の象徴としての健康による外ないのです。してみれば、老人にとって健康を阻害し、病気になることは、非常なショックであり、我々若い者には想像を絶するほどの不安を覚える様です。とりわけ、一時的な病いならまだしも、長期間に渡り、しかも床につかねばならぬ様な病氣に至つては、家族に多くの負担をかけ、人間關係を悪化させる恐れがあると同時に、家族に氣がねしなねばならない、惨めな状態になる自分に耐えられず、老人にとっては生きる屍に等しいのです。特に女性における精神的苦痛はいやしがたいものがあると思われ

ます。

この様な現代社会にあつては、容易に将来自分もこの様な苦悩を味わうかもしれないということが予測され、

著るしく不安、絶望を感じ、なんとかこの様な重い状態にならぬ様に、もしこの様な事態になるのなら、ポックリ死にたいと願ひ、神、佛にすがり、助けて下さい、救われたいと宗教の対象を求めるのは、必然的なことであります。

ポックリ寺は、この老人の願ひ、要求に答えてくれる対象であるのです。

端的に言うならば、ポックリ信仰は、老人の現代社会からの静かな離脱現象であり、反面、老人の現体制に対する悲しい、弱々しい抵抗の現われであり、現代社会において、人間老人としての尊厳を保つた一つ残された手段なのです。それは、社会的弱者としての老人の佛に救いを求める言葉なき哀願の叫びなのです。

よつて我々はポックリ信仰を求める老人達の眞の叫びに謙虚に耳を傾けなければならないと思うのです。

最後に、これら老人達の言葉なき哀願の叫びを、ただ単に宗教的な事象であるという理由で、脳裏から抹消して良いものでしょうか。今こそ、現代社会の既成価値、枠組等から離れ、とらわれることなく、事実を事実とし

て謙虚に見つめる努力が必要ではないでしょうか。
対策は、それからでも決して遅くはないとつくづく思うのです。

最後に、乱世と言われる現在益々、その激しさを増し

地域における寺院の福祉活動

①窮村を救う

亀岡市史によると、丹波鎌谷村（現在京都府船井郡瑞穂町大字鎌谷下、中、奥、東又）は江戸時代亀山藩領であった。文化文政の頃、戸数約一三〇余りで、田収は九百余石住民は困窮していた。中でも東股村が窮乏甚しく、虫追行事すら出来ない程で、やがて亡村にもなろうとしていた。この村の真言宗寺院松岩寺も疲弊し

「此寺、前二十三世住侶志薄して佛像及精舎を破壊し、什器を分散し干茲僅に一鉢一衣にして寒月弊床を窺ひ曉風破窓に入る一度はかなしみ一度は憐然として志を立んとすれども寒郷の窮民力を添ふことあたはず」

というのが六世晁雄法印の在住当時のありさまであった。晁雄法印は

「独儉を守り師（師高野山西院谷正覚院千離法印）の賜を以て佛陀を莊嚴し精舎を修理し高く石壇を築て地を開き廢田を補い後山の次を払いて桧杉数千を植、栗数百株を栽、年々に什器を集め苟全に至る。常に村民の力を借らず窮民の忌年祥月には米蔬菜醬を施し自ら往て三宝を供養し、靈魂を祭り民の困苦を

ているインフレ、不況、人心の不安というある意味で極限的なアノミー状態は、刻々と老人をして不安へと加速させることを憂慮せざるを得ないのです。

（佛教大学講師・社会福祉学・写真も筆者による）

を賑し、後日につぐなうことを乞はず。真に稀有の聖なり。」
聞て財銀

——鎌谷村地誌——

とある。法印はたんに東股村だけでなく、多紀郡冬村にもこうした活動を展開していると思われるが積年の努力、藩主松平氏の耳に達し、文政二年七月「其之年來佛法堅固に住職被致隨喜之事に候其三荒村之窮民共へ厚賑給被致耕耘灌漑無怠租稅無延滞ものも儘在之全教導の行届候処寺檀更和順之趣積徳之聞在之に付為賞白銀三枚下之」

という褒詞をうけただけでなく、藩政の上からも目するところとなり、公的救済策として

「君公深く憂い給い茲年文政末（六年）の春より家土に命じて聊民力を助、吸氣を勵しむ故に梅ヶ谷（東又小字梅ヶ谷）という処に飯屋をしつらひ廿余輩を遣さる——漸民も呼氣を生、精神を益勵すこと全く君の恵のいぢるし四方に聞へ来て民たらんことを願ひはや戸員も三四箇も増しぬ——」

註 現松岩寺第十三世日下部徳映法師はたまたま、兵庫県多

紀郡草山村馬頭觀世音堂改築に招かれ、導師たることを要請された。その理由として、旧屋の棟木に晁雄法師の力によることが記されていたからであったと筆者に述べられた。